

『高知大学留学生教育』第11号の刊行に寄せて

キャンパスから外に出よう！

高知大学国際連携推進センター
センター長 新 納 宏

毎年4月になると、留学生がやってくる。国際連携推進センターにはしばらくスーツケースを抱えて右往左往する留学生の姿が見られる。そこから半年間長くて4年間、異国の地、高知に住むのだ。観光旅行的な高揚感は1ヶ月も経たないうちに萎み、カルチャー・ショックによる失望や不安の時期が始まる。そんな時期に地域の人と知り合い助言をもらおうと、徐々に適応期に向かっていく...

留学生は到着後、すぐに高知大学の狭さに驚くらしい。そこで海外の協定校の様子を少し見てみよう。

協定校に出かけると、いつもその大きさにビックリする。例えばマレーシアのプトラ大学。大学構内で学生の車に乗せてもらっているうちに、ウトウトと眠ってしまった。ハッと目が覚め、今どこか聴くと「まだ大学の中」だそうである。この大学には何とゴルフ場、乗馬クラブすらあるのだ。クアラルンプール郊外のこのセダン・キャンパスのみで1108ha あるそうだが、何と東京ドームグラウンドの855倍である。もちろん構内移動はバスか車だ。坂もあるので自転車ではちょっときつい。

タイのコンケン大学も巨大だ。大学の中に街があるという感じ。郵便局も食堂も病院もある。900ha だから、東京ドームグラウンドの700倍近い。タイで最も広大なキャンパスだ。東アジアの大学は都市部と地方部では異なるが、とにかく大きいし、設備も整っている。中国の大学もほぼ同じだ。

この2つの大学はその国で最も広いのでちょっと別格としても、米国テキサス大学ダラス校の180ha も東京ドームグラウンドの140倍。当然構内は車で移動だ。そもそもダラス空港に到着したときからビックリだった。手荷物受取建屋の一番向こう側が霞んで見えるのだ。迎えの車がどこに着いているのか、探すのも大変だった。テキサス州だけで日本よりも広いのだから、当然といえば当然である。この大学では毎日、地平線に太陽が沈むのを見なが

らホテルまで帰った。

ヨーロッパの大学はやや趣が異なる。スウェーデンのイエーテボリ大学は街なかにキャンパスが散在しており、しかも、街と大学の区別がない。歩いているといつの間にかキャンパスだ。街と一体化しており、面積が広いが狭いかという問いは適さない。これはもともと歴史が古く、街の中にあった様々なカレッジを編入しながら発展してきたからだと言う。

さて高知大学だが、朝倉メインキャンパスは約16haだ。地方の中規模大学は高知大学とだいたい同じぐらいだろう。広いキャンパスから来た多くの留学生から見るとかなり狭い。食堂も売店も昼休みはごった返す。コモンス的なスペースも少ない。

そこで留学生には是非キャンパスの外にも目を向けてほしいと思う。高知の人は外国人でもすぐに（日本語で）話しかけてくれるし、一旦家に客を迎え入れると、なかなか帰してくれないほどお客好きだ。また大学近くには仁淀川などの自然もいっぱいだ。幸い朝倉の大学前からは土佐電鉄やJRが市街地や郊外に向かって走っている。地元の魅力も含めての大学だ。

国際連携推進センターは平成29年度に「地域課題体験プログラム」を行った。キャンパスの外に出て、地元の人と触れ合いながら、高知のいいところと抱える課題を学んでもらうためだ。課題先進県高知を知れば、10年後の日本も考えることができる。

平成30年度にはこの体験プログラムを共通教育の正課に取り入れ、日本人と外国人と一緒に地域体験をしてもらう予定だ。また7月には英語圏協定校向けの文化体験サマープログラムも開設する。その他高知大学では、準正課の「えんむすび隊」をはじめ、多くの地域探求プログラムを用意している。留学生よ、キャンパスから外に出よう！